

「珈琲のチカラ」

船倉賞

北海道札幌市 角谷 千飛路

「両親が事故で意識不明です」

九年前、小学校5年生だった私は、事態を飲み込むことができず、しかし、心臓は高鳴り、目の前が真っ白になったことを、今でもはつきりと覚えていています。

我が家の朝は珈琲から始まります。朝一番に父が珈琲をおとし、水筒に入れます。部屋中にいい香りが漂います。私と5歳下の妹は、両親が出勤した後に起床し、二人で朝食を取ながら、水筒の珈琲を飲みます。

春休みのある日、両親は妹の入学祝いのお返しを届けるため、隣町の小樽まで出かけていたのです。

電話で両親の事故を知った私は、涙をこらえて、妹の手を握りしめました。

そして珈琲が入った水筒とおやつを急いでリュックに詰め、わずかな小遣いをふところに入れて、小樽の病院に向かいました。

おそろおそろ病室にはいると、母は目をつぶり点滴をしています。人の気配に気づいた母は、夢でも見ているかのような表情で私たちをみつめました。その目

はすぐに涙で真っ赤になり、「父さんが

……」それ以上は言葉が出てきません。

父は集中治療室にいました。意識はありません。

その夜先生から、「これ以上治療はできません。もうすぐ心肺が停止します」と宣告されました。

母は、私を持ってきた水筒の珈琲を、ほんの少し口に含み、父に口移ししました。

父の顔が一瞬ほころび、そして静かに息を引き取りました。

父が大好きだった珈琲を、死に水にすることができ、少しだけ、親孝行ができたような気がしました。

いま、朝の珈琲は私がおとしています。「おいしい。お父さんを思い出すわ」

ようやく、母に笑顔が戻ってきました。珈琲のチカラです。

